

調査報告

「異文化理解」科目における共通教科書導入に向けて — ドイツ語授業アンケート調査の分析を手がかりに —

大喜 祐太

Report on the Introduction of a Common Textbook — An Analysis of a Questionnaire Survey on German Lessons —

DAIGI Yuta

〈Abstract〉

In this paper, I report our efforts to introduce a common textbook in the “Foreign Studies I Basic & Seminar (German)” classes at Mie University. In order to correct differences in teaching content, difficulty level, and grammatical lessons between the classes, a common textbook was introduced in 2019 based on the common teaching materials used in 2018. We clarify the educational purpose of and the course content shared amongst different German lessons in the German language courses at Mie University, so that each student can take German lessons according to their own specific needs. At the end of the spring semester in 2019, a questionnaire survey was distributed among students in order to understand their impressions of the textbook. This paper also reports on this questionnaire survey, which was conducted on the lessons.

キーワード：ドイツ語、異文化理解、共通テキスト、共通教科書、授業アンケート

はじめに

大喜（2019）では、三重大学選択必修科目（一年次）である「異文化理解I（ドイツ語）基礎・演習」（以下、各授業を「基礎」「演習」と略記）に関して、三重大学教養教育ドイツ語学科目の取り組みを紹介し、さらに2018年度から導入した共通教材および共通テストについて報告した。とりわけ、その中では「基礎」および「演習」で使用する共通教材の内容や共通テストの実施方法について解説した。異なる授業担当者が共通して利用できる教材や授業履修者の共通試験を実施することによって、クラス間の授業進度や内容のばらつきを軽減するという目的をある程度は達成することができた。とはいえ、2018年度には教科書の選定が各授業担当者に任されていたことにより、共通教材と教科書の進度が必ずしも一致しないという問題点が生じた。そのため、2019年度より、2018年度に使用していた共通教材に加筆・修正を施した「共通テキスト」を導入した。本稿では、2019

年度前期に履修学生を対象に行った「共通テキスト」についてのアンケート結果について報告し、さらに 2020 年度に新たに導入する「共通教科書」についても言及する。

1. 三重大学のドイツ語

大喜 (2019: 63) でも報告されている通り、三重大学の「異文化理解」教育は、一年次(再履修生の受講も可能)の選択必修(人文・教育・医・工・生物資源学部)となっている。ドイツ語については、2019 年度の「基礎」「演習」クラスは、約 340 名の履修学生がいる。ドイツ語の授業は、火・木曜日の週 2 コマで行われ、再履修学生などを除けば、基本的には前・後期通年で履修を想定している。期末試験を含めると、授業は半年で 16 回あり、履修学生は、少なくとも年間 96 時間をドイツ語の授業に費やしている。

「基礎」および「演習」両授業の目的は、言語としてのドイツ語の基本的な構造を把握することによって、ドイツ・オーストリア・スイスといったドイツ語圏の国々の言語や文化に対する理解を深めることにある。具体的に言えば、(1)ドイツ語の基礎的な文法を把握すること、(2)ドイツ語の基本語彙を身に付けること、(3)ドイツ語圏の文化を理解することである。草本 (2019 78-79) でも指摘されている通り、「異文化理解」教育は外国語教育の目的の一つとして広く認知されている。もちろん、そうした「異文化理解」にも複数の解釈があるが、本授業では、いわゆる「ランデスクンデ」(地誌・文化)を手がかりにして、(3)のドイツ語圏やドイツ語自体への理解を深めることに主眼を置いている。

学習者の到達目標は、前期は独検 5 級レベル、後期は独検 4 級レベルと定められており、検定試験に合格した場合当該科目の成績への加点が認められている。また、シラバスには記されていないが、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) の評価指標に準拠するならば、後期終了時には A 1.2 レベルまで到達していることが見込まれる。

2018 年度に行われた共通教材の導入を通して、学生たちにとっては、初級ドイツ語の授業の一年間で学ぶべき文法事項や基本語彙、またはドイツ語圏の文化などは明確になったと言える。加えて、授業担当者側としても、発展的ドイツ語科目履修者のおおよそのドイツ語レベルを学期開始前に把握できるようになった。とはいえ、授業形態の若干の変更に応じて授業運営上の欠点も生じた。たとえば、基礎と演習の授業では担当者が異なるため、両授業が十分に連動していなければ、やはり授業ペアによって足並みが揃わないということもある。しかも、2018 年度の共通テストの際には、授業内で実際に進められた内容より少し物足りないと感じてしまう学生がいるクラスもあったため、2019 年度の共通テストについては実施を見送る方針をとった。

「異文化理解」科目における共通教科書導入に向けてドイツ語授業アンケート調査の分析を手がかりに

2. 「共通教材」から「共通テキスト」へ

上述の通り、異文化理解（ドイツ語）では、2019年度より、2018年度の「共通教材」に加筆・修正を施した「共通テキスト」を導入した。基本的には「共通教材」に基づいた構成・内容であるが、改訂を行った点を含めてテキストの概要を以下に示す。

先に挙げたドイツ語の基礎的な文法を把握するという目標を達成するために、テキストでは「キーセンテンス」と「文法説明」、さらに「ペア練習」を通じた文法理解の定着を優先事項として定めている。また、各課扉にある「語彙リスト」には、一年次に必要とされるドイツ語の基本語彙が記載されており、合計約600語が収録されている。加えて、「読み物（Lesen）」と「練習（Übung）」では、ドイツ語の読解力向上を目的とする。「アクティビティ」では、各課の語彙や文法事項を実際に使って、ドイツ語でコミュニケーションをとるために利用される。さらに、「ドイツ語圏の文化」では、各課のテーマ毎に、ドイツ、オーストリア、スイスといった国々の地理や歴史、政治などのさまざまなドイツ語圏の文化を理解することを目標としている。吉島・境（2003: 92）でも、外国語教育には「教養」と「実用」の両側面が必要とされると述べられているが、「共通テキスト」は、異文化理解を通じて異文化間コミュニケーションの土台を築くという点では、教養としてだけでなく、実用的な側面にも目を向けたものであると考える。

本テキストは、基本的に週2回のドイツ語基礎科目を受講する授業カリキュラムを想定しているため、異文化理解「基礎」「演習」の2コマ×2週、つまり4回の授業で一つの課を終えることができるように考えられている。次ページの表1はテキスト内で扱う「文法項目」および「テーマ」であり、テキスト末には各課の問題集が付属する。

「基礎」の授業では、語彙リストの確認とキーセンテンスおよび文法説明にある重要項目の習得を目指し、その際、ペア練習や巻末の練習問題を活用して重要なポイントを反復することによって、基礎的な文法事項を理解できるようになっている。

一方、「演習」の授業では、キーセンテンスと文法説明を再度確認しつつ、ドイツ語の読解力と会話力の向上に重点が置かれている。読解力については、Lesen と Übung があり、さらに各課に Lesen 1 と Lesen 2 が設けられているが、Lesen 1 は基礎レベル、Lesen 2 は応用レベルであり、授業担当者の裁量で問題が選択される。また、アクティビティを学生同士で行うことによって、ドイツ語会話力の向上が期待される。その際、語彙リストで単語の意味を確認することによって、よく使われる語彙や言い回しなどの定着を図る。さらに、ドイツ語圏の文化の項目では、言語としてのドイツ語だけでなく、幅広くドイツ語圏の文化に触れることに重点が置かれている。そこで取り上げるテーマは、表1にも記載した通り、1) 挨拶・自己紹介、2) 趣味・余暇、3) 持ち物、4) 住居・数、5) 自然・

表 1: 「共通テキスト」の目次

	文 法 事 項	テーマ
導入	アルファベット・発音・数字	
第 1 課	動詞 (1) 規則変化 (単数と複数) と sein	挨拶・自己紹介
第 2 課	動詞 (2) 不規則変化・名詞の格変化	趣味・余暇
第 3 課	動詞 (3) 不規則変化と haben・3/4 格と結びつく動詞・否定冠詞	持ち物
第 4 課	2 格の用法・複数形・序数・人称代名詞	住居・数
第 5 課	所有冠詞・定冠詞類・命令形	自然・身体
第 6 課	前置詞	街歩き
第 7 課	分離・非分離動詞	交通
第 8 課	話法の助動詞	予定・計画
第 9 課	再帰代名詞・非人称表現・従属接続詞・zu 不定詞句	学校
第 10 課	現在完了形・過去形	過去のできごと
第 11 課	形容詞・日付の表現・比較級	季節
第 12 課	関係代名詞・関係副詞・指示代名詞	政治

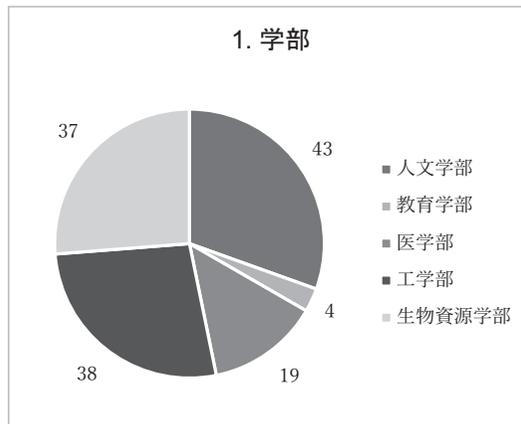
身体、6) 街歩き、7) 交通、8) 予定・計画、9) 学校、10) 過去のできごと、11) 季節、12) 政治であり、基本的には各課の文法事項・テーマに沿った語彙が選定されている。「演習」の授業での目標は、学生がドイツ語圏の文化を理解することにあるため、授業中に、テーマごとに授業担当者がドイツ語圏の文化を紹介すること、また場合によっては学生たち自身がプレゼンテーションなどを行うことを推奨している。もちろん、「演習」で扱うことのできるテーマは基本的には初級者を対象とした一般的なものに限られるものの、今後のドイツ語学習を進めていくために必要とされる知識だけでなく、これまでにあまり馴染みのない文化や慣習を理解するきっかけを提供するような工夫が施されている。

3. アンケート調査

2019 年度の前期授業が終了した時点で、履修学生を対象としたアンケート調査を行なった。当該アンケートは「基礎」および「演習」で使用する「異文化理解 (ドイツ語) 共通テキスト」およびテキストを用いた指導法について検討するために実施されたものである。

3. 1 履修学生

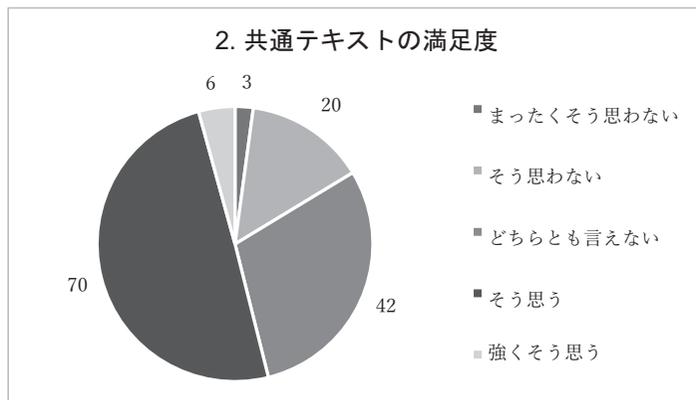
2019 年度前期の異文化理解 I ドイツ語の履修者は、再履修者も含めて約 340 名ほどであるが、最終的に得られたアンケートの回答数は 141 名分である。グラフ 1 の通り、アンケート回答者の学部別内訳は、人文学部 43 名、教育学部 4 名、医学部 19 名、工学部 38



名、生物資源学部 37 名となっている。また、全体の 95 % は一年次生であり、98.6 % が初修外国語としてドイツ語を学ぶ履修者であった。

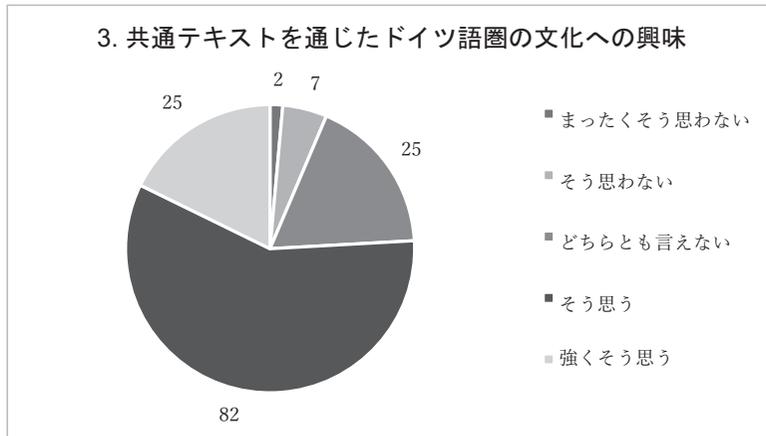
3. 2 「共通テキスト」の満足度

グラフ 2 は「共通テキスト」は全体として満足できる内容ですか」という問いに対する回答である。およそ半数の学生が「そう思う」「強くそう思う」を選択するという結果であった。「まったくそう思わない」もしくは「そう思わない」を選んだ場合、「どのような内容を充実させるべきか」について自由記述欄を設けたところ、以下のような回答があった。たとえば、「もっと文法の解説を増やしてほしい。見やすいレイアウト（表など）にしてほしい」「より具体的な例題や文を入れて欲しい」「いきなり長文を読むのは難しい」というような「共通テキスト」の内容に対するものや、「基礎を習ってすぐ演習というのがついていきにくかった」などのカリキュラム上のもの、さらに「発音の練習、単語読みの為の音声 CD が欲しかった」といった付属資料に関する改善点について言及するものも多く見られた。



3.3 「共通テキスト」を通じたドイツ語圏の文化への興味

グラフ 3 は、「共通テキスト」を通じて、ドイツ語圏の文化に興味を持ちましたか」という問いに対する回答である。



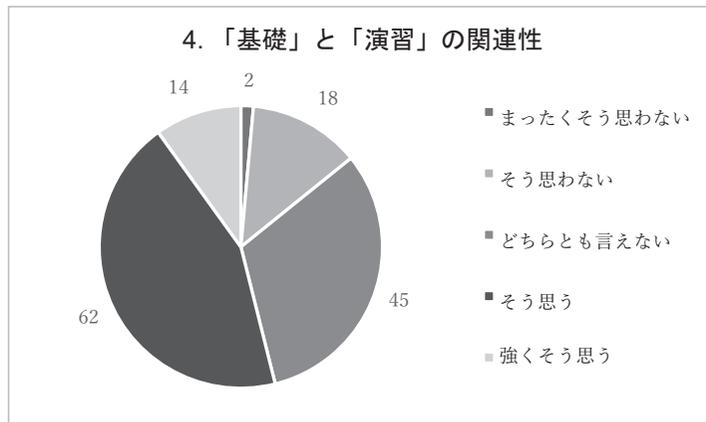
回答の結果、約 4 分の 3 の学生が「そう思う」もしくは「強くそう思う」と答えていることから、多くの学生は「共通テキスト」を通じてドイツ語圏の文化に対して何らかの興味を持ったことがうかがえる。自由記述欄に「教科書に登場する単語に関連したドイツの文化や豆知識を教えてくださいましたので楽しめましたし、覚えやすかった」と記した学生もおり、テキストを用いた授業にある程度満足している履修者も多かった。しかし、「共通テキスト」の項目や内容に対する指摘もいくつかあり、今後テキストの内容を改善していく必要があることが示された。

3.4 異文化理解 I (ドイツ語) 各授業 (基礎・演習) の関連性

先にも示した通り、「基礎」は文法、「演習」はドイツ語圏の文化の理解を中心とした授業として位置づけられている。「基礎」と「演習」では授業担当者が異なるため、仮に両授業でそれぞれ全く関連性のない教科書が採用され、授業が進められた場合、両授業で重複する内容があるか、あるいはどちらでも扱われない項目が出てくる可能性もある。そのような各授業の関連性についての懸念が「共通教材」および「共通テキスト」作成の動機の一つになっている。

そこで、グラフ 4 の通り、「共通テキスト」の導入によって、「基礎」と「演習」の授業内容に関連性があるかどうかについても質問した。半数以上の学生は両授業に関連性を認めているが、約 13 % の履修者は「まったくそう思わない」「そう思わない」と答えており、「共通テキスト」を通じた両授業の結びつきについてさらに検討しなければならない

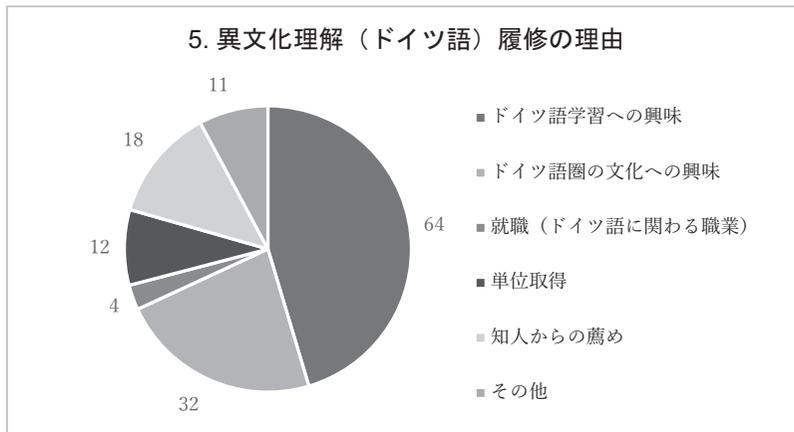
「異文化理解」科目における共通教科書導入に向けてドイツ語授業アンケート調査の分析を手がかりに—



とともに、教材以外の方法を用いて両授業の連携（授業進度の調整など）を強化する必要性も明らかになったと言える。

3.5 異文化理解（ドイツ語）履修の理由

アンケートの最後に、異文化理解科目においてドイツ語を選択したきっかけを尋ねたところ、グラフ5のような回答となった。



ドイツ語に限らず「異文化理解」の授業が必修科目となっているとはいえ、「ドイツ語学習への興味」や「ドイツ語圏の文化への興味」といった積極的理由を挙げる履修者が多かった。その他には「英語との共通点」を挙げる回答や「会話中心というのに惹かれた」「声楽をやっていてドイツ歌曲を扱いたいから」「好きな芸能人がドイツ語を話せるから」といったものも見られた。

4. 「共通教科書」の導入に向けて

2019 年度には、「共通教材」を加筆・修正した上で「共通テキスト」を作成し、当該テキストにおける修正すべき箇所の精査および学生へのアンケート調査の結果を踏まえ、2020 年度より新たに「共通教科書」を導入する。当該教科書は、「共通テキスト」の内容に加え、さらに二次次以上で学ぶべきとされる応用的な文法事項（受動態・形容詞の名詞化・分詞・接続法）も含んだものである。読み物やアクティビティについては、「共通テキスト」の内容では前期の時点では少し難易度が高いと感じる学生が多かったため、課を追う毎に徐々に問題のレベルが上がっていくように配慮した。また、アンケート調査でも改善案が提示されていたが、発音練習のための音声ファイルも付属する予定である。

おわりに

アンケート調査では、「共通テキスト」の内容にある程度満足している履修者がいる一方で、各項目の詳細について改善を希望する回答も多く見られた。調査結果からもわかるように、多くの場合学生たちはドイツ語圏の文化やドイツ語学習自体に興味を持ち、異文化理解科目にドイツ語を選択している。ドイツ語学科目では、これまでの「共通教材」および「共通テキスト」といった教材開発の目的や内容を念頭に置いて、2020 年度以降「共通教科書」を導入する。「共通教科書」は、「共通テキスト」と同様に、基本的には総合教材（文法説明と基本語彙の習得、アクティビティや読み物の充実、ドイツ語圏の文化の理解）として位置づけられるが、「基礎」および「演習」の両授業での目的をそれぞれ明確にし、各授業で具体的な到達基準を与えられるようなカリキュラム・教材作りを目指している。今後も担当教員間での話し合いや、学生へのアンケート調査などを定期的に実施し、学内の異文化理解・ドイツ語教育の充実を図りたい。

引用・参考文献

- 草本品 (2019) 「外国語教育と「異文化理解」」ドイツ語教育 23, 日本独文学会ドイツ語教育部会, 75-80.
- 菅利恵, 大喜祐太, 大河内朋子, 井口靖, 鶴田涼子, Bartholome Sebastian. (2019) 『三重大学異文化理解 (ドイツ語) 共通テキスト』三重大学ドイツ語学科目.
- 大喜祐太 (2019) 「「異文化理解」教育の充実を目指して - ドイツ語共通教材導入の取り組み」三重大学高等教育研究 25.
- 吉島茂, 境一三 (2003) 『ドイツ語教授法 - 科学的基盤作りと実践に向けての課題』三修社.